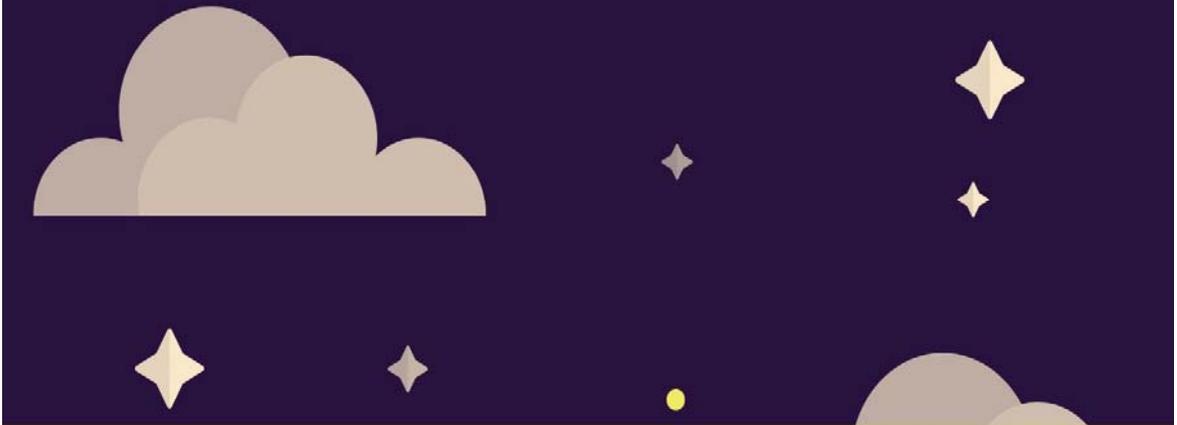




リンちゃんとターリンの大冒険

エルブルス山へ

作：吉本早希



RINDA
PUBLISHING
BOOK STORE

ロシアにあるエルブルス山のとっぺんに、ランちゃんという9才の女の子が、のら猫のレディと一緒にくらしていました。

山のとっぺんなので、食べるものはなく、食べ物はいつも、山のふもとにいる「AIロボット」に注文をしてドローンに運んでもらう生活をしていました。

そんなランちゃんの性格は、とても前向きで、心優しく、動物が大好きです。

ただ一つ嫌いなことがあり、それは「無理」という言葉でした。

ある時、リンちゃんとダーリンは地球に住む人や生き物を幸せにするという言い伝えの「魔法のコイン」を探しに、このエルブルス山のふもとまで、旅にきていました。

山のふもとには、AIロボットがいっぱいで、人の姿は、ほとんどありません。

「どうしてなんだろう？」とリンちゃんは不思議に思いました。

道ばたに ポツンと座っている老人がいたので、たずねてみました。

すると、

「今から少し前のこと。ある お金持ちの人が、この町に引っ越してきて工場を作り始めたんだよ。

その工場は、人間そっくりのAIロボットやAIを作る工場で、AIロボットに全ての仕事をさせはじめたんだ。

そのことで、これまで仕事を持っていた人々は、仕事を失ってしまったんだ。人々はこの町からいなくなったり、自信を失くしてしまった。

『自分の存在は、いらないんじゃないか』ってね。」

続けて、こう話しました。

「人々は、希望や夢、安心を失っただけではない。自然まで失ってしまった。この町は、それまでは自然にあふれていたんだが、

大きな工場が、次々に作られてしまって、あっという間に自然まで無くしてしまったんだよ」

とても さびしい表情をしていました。

その話を聞いて、リンちゃんはとっても悲しい気持ちになりました。

「ねえ、おじいさん。
私は「まほうのコイン」を探しているの！
みんなを幸せにすることができるという魔法のコインが
このあたりにあるって 聞いてきたの。
どこにあるか、知っているかしら？」

「魔法のコイン？
さー、知らないなー。
でも、もしかしたら、そのコインは、
このエルブルス山のテッペンに住んでいるという
ランちゃんという女の子に聞けば、知っているかもしれないな」

そう答えました。

さー、大変です。
エルブルス山は、標高が5642メートルもある、とても高い山です。
でもランちゃんに会いに行くには、登るしかありません。

愛犬のダーリンといっしょに、何日も何日もかけて、登ることにしました。

60日がたっていました。

ようやく山のテッペンについたリンちゃんとダーリンは
おなかがすいて、ぐったりしてしまいました。

そこに、女の子が猫をつれて あらわれました。

ランちゃんです。

「あら大変。私家で休むといいわ！」
と、ランちゃんは、リンちゃんを だっこして、つれて行きました。

少し食事をとったあと、リンちゃんとダーリンはそのまま眠ってしまいました。

1週間も ね続けたリンちゃんは
猫の鳴き声で目が覚めました。

ランちゃんは、リンちゃんに聞きました。

「あなたは、ここに何をしにきたの？」

リンちゃんは、魔法のコインを探していることや
この山のふもとで 出会った おじいさんに、
魔法のコインが どこにあるかを たずねたら
この山のテッペンに行けば、ランちゃんという 女の子が 住んでいるから
その女の子に 聞くと わかるかもしれないと 教えてくれたことを
伝えました。

そして、リンちゃんは、
山のふもとには、AI ロボットが いっぱいいいて
その AI ロボットに仕事を取られてしまった人々が、自信を失くしてしまって
町に人の姿は あまり なかったことを話しました。

ランちゃんは、少しだまったあと、
静かな声で こう こたえました。

「私も魔法のコインを探しているの。
まだ見つけることができていないけど
でも、自信を失くした人々を助けることはできるかもしれないわ！
いっしょに考えましょ！」

そう言って、ランちゃんは、リンちゃんとダーリンといっしょに
人々に自信を 取りもどしてもらおう作戦を 立て始めました。

ランちゃんは あることを思い出しました。

それは、ランちゃんが昔、絵本を読んで
勇気づけられたことでした。

「あっそうだわ！
絵本を書くことで、もしかしたら
人を元気にしたり、勇気を持ってもらうことができるかもしれないわ！」

「それは素敵なアイデアね！
絵本なら文字を読むのが苦手な人でも最後まで読むことができるわ！
いっしょに書きましょう！」

ランちゃんとリンちゃんは、いっしょに物語を書くことにしました。
ダーリンは、絵をかきました。

とても素敵な絵本が出来上がりました。

さっそく、この絵本を人々に読んでもらうために、
山を 何日も何日も かけて おりました。

山のふもとに たどり着いたランちゃんとリンちゃんとダーリンは
AIロボットたちの力を借りて、人々を集会所に集めてもらいました。

これまで町に 人々のすがたは ありませんでしたが、
集会所には たくさんの方が集まってくれました。

さー、絵本の読み聞かせの時間が はじまりました！

「みなさん、ここに集まってくれてありがとうございます！
私の名前はランと言います。
みんなに 元気になって欲しくて
私は、ここにいるリンちゃんといっしょに 絵本を作りました。
ぜひ、聞いてください！」

ランちゃんとリンちゃんは、代わる代わる、いっしょに作った絵本を読み
ダーリンは、ページをめくります。

作った絵本のお話は、こんな物語でした。

とある町のお話で、AIロボットと人々がいっしょに暮らしていました。

最初、人々は、AIロボットに なんでも たよって楽をして暮らしていました。

そのうち、なんでもできるようになっていく AI ロボットに
仕事のほとんどが渡されるようになり、いつの間にか、人々がする仕事が
なくなってしまいました。

すると、その町からは人がへり、町には、競争やケンカをする人ばかりにな
ってしまいました。

そのうち、町に人が出ることは なくなってしまいました。

そんな町の様子を見て、なんとかしたいと思っていた女の子が、
ある日、「みんながイキイキして暮らせる方法」を思いつきます。

それは、2つのことでした。

一つ目は、AI ロボットを作る工場長さんをお願いして、
一体一体の AI ロボットの得意なことや良さを教えてもらうこと。

そして、人々の生活で必要最低限のことだけを取り出して、それ以上は
AI ロボットがしないようにプログラミングして、
一体一体の AI ロボットにそのプログラムをインストールしてもらうこと。

二つ目は、町に住む全ての人たちをお願いをして、
「それぞれの人の強みや良さを書き、とても自分が助かっていることや、
これから、その強みを生かして、町のみんなを支えてほしいこと」
など、住む人全員分の寄せ書きカードを作ること。

人々は、寄せ書きを書くうちに、これまで忘れていた
ここに住む人たちの、それぞれの強みや良さを思い出し始めました。

そして、みんなからもらった寄せ書きを読んだ人たちは、
自分の強みや良さを気づいてもらえたことに喜びを感じ、
笑顔になりました。

その町の人たちは

「人にはそれぞれ人の得意なこと、でも苦手なこともあるし、同じように AI には AI の得意なこと、でも苦手なこともある。だとすれば、人も AI も、それぞれの得意なことを生かし合って、助けあえば良いよね」

という気持ちになって、人の楽しそうな笑い声が あちらこちらから聞こえるようになりました。

そんな風に、AI ロボットと人間がとても仲良く暮らすようになっていきました。

というお話でした。

この物語を聞いていた町の人たちは、まるで自分たちのことのように思い、

「そうだ。自分たちもこのお話のように、すればいいんだ！」と、ある若者が言ったしゅんかん、町の人たちの顔の表情も、パッと明るくなりました。

次の日から、町の人々は「自分たちが心から暮らしたい理想の町」をみんなが話し合う会を開き、少しずつですが、人々は、自分の好きなことや得意なことを仕事にし始めました。

そして AI ロボットは、人々が働く環境を分析して作るのが得意なので、人が自由自在に 公園やベンチなどでも仕事ができる環境を 作り始めました。

自然がなくなりつつあった町は、園芸が得意な人たちによって、チューリップや紫陽花の花が咲くようになりました。

AI ロボットの工場を作ったお金持ちの社長さんは、「みんなが暮らしたい理想の町」の話を聞いて感動し、人々の家のお庭に木を植えてくれました。

こんな風にして、エルブルス山のふもとに住む人々は、「自分たちが心から暮らしたい理想の町」を考え、力をあわせていくことで、自信を取りもどしていきました。

町には、自然も よみがえって いました。

まるでランちゃんとリンちゃんがいっしょに作った絵本のように
町には笑い声があちらこちらから聞こえ、
AIロボットと人々がとても仲良く暮らすようになったのです。

「ねー、ランちゃん！
私たち、魔法のコインは見つけれなかったけれど、
ここに住む人々の心がキラキラしているね。
まるでそれは、魔法のコインのようね！」
リンちゃんは言いました。

ダーリンとランちゃんは、こっくりと うなずきました。

この町の人々は幸せな暮らしを取り戻したけれど、地球を見渡すと、
まだまだ困りごとがたくさんあります。

「さーダーリン！次はどこの町へ行けば良いかしらね？」

こうして、リンちゃんとダーリンの旅は、これからも続いていきます。





RINDA
PUBLISHING
BOOK STORE



RINDA
PUBLISHING
BOOK STORE

ラン



早希さん、あなたはとても幸せな、おばあさんになっています。そんなあなたを想像してみてください。

Q1:何才になった自分を思い浮かべましたか？

A1:90才

Q2:90才のあなたは、これまで、どんなことをして幸せになりましたか？

A2:90才の私は、簡単にできることではなく自分が難しいと思うような様々なことに挑戦をして、それを次々に達成してきたの。それがとても幸せ。例えばどんなことに挑戦したかといえば、私は昔から本が好きなのだけど、そこから自分で本を出版したわ。心理学系の本や、絵本。

そうそう、なぜ絵本かというと、それは、小説だと読むのが苦手な人がいるでしょ。絵本は好き嫌いがないように思うし、それに、どんな人でも気楽に読めるじゃない。例えば「魔法のコインをさがしに」だと、環境系。

私は、自分の行動や考えによって、人の心を動かして幸せにするような「絵本」を世に出して、世界中の人が私の絵本を読んでくれて、私にたくさんファンレターをくれるの。

私は、とっても幸せよ！

作 ● 吉本早希さん

2009年東京都生まれ。

絵を描くこと、本を読むことが大好きで、愛猫を大切な家族として愛情をたっぷり注ぐ小学校5年生。
8つ歳の離れた兄がサッカーブラジル遠征や、ロシアホームステイを経験したことをきっかけに、遠く離れた国の出来事もより身近に感じ、広い世界に目を向け、地球視点で環境問題について関心を持つようになった。
夢は、何度も繰り返し読みたくなるような素敵な絵本を残すこと。読んだ人が温かい気持ちや元気になってくれることが幸せ。そのために新しいこと、難しいことにも挑戦し、たくさんのお会いと楽しさを発見していきたいと考えている。リンちゃんとダーリンのように♪

● STAFF

編集 有川 凛

メンターコーチ 有川 凛

RINDA foundation JAPAN (since 2018～) がこの本を作りました。

私たちは、子どもたちが主体となって自由な発想を広げ身のまわりや地球の困りごとについて、みんなが「笑顔」になれる活動をしています。

これからの未来を担う世界中の子どもたちとともに、人々が健康に生きる持続可能な社会の実現に貢献すること、そして笑い声を常に聞くことができることを目指しています。

3つのE

EDUCATION (教育・共有)

EQUITY (公平さ)

ECOLOGY (エコ)

「3つのE」への取り組みを通じて、だれもが自分の価値を認め、「生きやすさのイコール(自分らしく生きられる世界)」を作ることをミッションとしています。

代表理事 有川 凛

有川 凛

1974年京都生まれ。社会が抱える問題解決や社会的価値の創出をほめるため、株式会社らしゅえっとを立ち上げる。企画開発した除菌水「まましゅっしゅ」が、2年連続キッズデザイン賞を受賞し、注目を集める。子育ての経験やアジアへの旅で出会った貧しい人々への衝撃が、世界の子どもの「笑顔・健康」を生み出す行動の舵を切るきっかけとなる。現在、一般財団法人RINDA foundation JAPANの代表理事として、また二人の男の子の母親として毎日を過ごしている。

リンちゃんとダーリンの大冒険

エルブルス山へ

2021年3月21日

初版発行

作 吉本早希

発行者 有川 凛

発行所 RINDA PUBLISHING

〒182-0002 東京都調布市仙川町3-5-14-402

TEL 03-5969-8556 <https://rinda-f.org>

印刷・製本所 RINDA PUBLISHING

©2021 RINDA PUBLISHING, Printed in JAPAN

乱丁、落丁本はお取り替えます。本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは、かたくお断りいたします。



SMILE認証について

SMILE認証は「社会貢献ブランド」です。RINDA foundation JAPANが定める条件に見合った商品(サービス)、イベント、プロジェクトにSMILE認証が付与され、代金の一部が「思いやり」の気持ちとして当財団のスマイル基金に積み立てられます。積み立てられた基金は、RINDA foundationで活動する子どもたちが選び出した支援先に届けられる仕組みです。

『世界をぐるり！こども絵本リレープログラム』は こんな思いをのせて、誕生しました。

「人は幼少期に自分自身の人生脚本を描くと、その通りになる」

カナダ出身の心理学者エリック・バーンの言葉です。
幼少期につくられる人生脚本の多くは、周りの大人、特に権威となる親や先生からのメッセージが無意識の中に書き込まれ、無意識のうちに生き方を決め、それに従い行動をするとエリック・バーンは語ります。

そうであるならば、

「人生脚本を、子どもたちのWant-toにフォーカスして子どもたちが創造していくプログラムがつかれないものだろうか？」

「無意識に植え付けてしまっている『制限事項』を取り払って、子どもたちの人生脚本をよりよい脚本に変化させていくことができれば……」

その思いから『世界をぐるり！こども絵本リレープログラム』を立ち上げました。

このプログラムは、リンちゃん和ダーリンというコンビが『地球を助けるために魔法のコインをさがしにいく』というゴール設定のもとに、プログラムに参加する子どもたちがまず最初に自分自身を投影したキャラクター(アバター)を創作し、自分が主人公になる一話完結の冒険物語を作り、次の子どもへとリレー方式で紡いでいくものになっています。

冒険好きの子どもたちの想像力をかき立て、自分たちが息づく大地である「地球」の今を、それぞれが見つめ、気づいていけるように紡いでいきます。

絵本づくりの過程で自分は一体何者なのか？

どういった未来を描き、どのように考え、どのように動くのか？

をデザインしていくわけですから、それはまさに「人生脚本」そのものです。

単なる「お話づくり」「絵本づくり」にとどまらず、

その子自身の無意識の中に、よりよい物語(人生脚本)をつくりあげていくこのプログラムは、私たち大人がこれからの時代を創造していく子どもたちに選んであげられる「大きなギフト」のひとつになるはずです。

そして、その記念すべき第一話がこの『魔法のコインをさがしに』です。

この絵本を手にした子どもたちが

「今度は自分を登場させて、どんな役で、どんなふう生きようか！」

と、次々に小さな種を落とし、主体的に大きな木になっていく姿、花を咲かせ、実をつけていく様子を、想像するだけでも、幸せな気持ちになります。

SMILE

~Sharing Miracle In Life Everyday~

一般財団法人 RINDA foundation
JAPAN 創設者
有川 凛



RINDA
PUBLISHING
BOOKSTORE